





失敗成功

第22話	第23話	第24話	第25話	第26話	第27話	第28話	あとがき
003	027	049	073	097	121	145	176











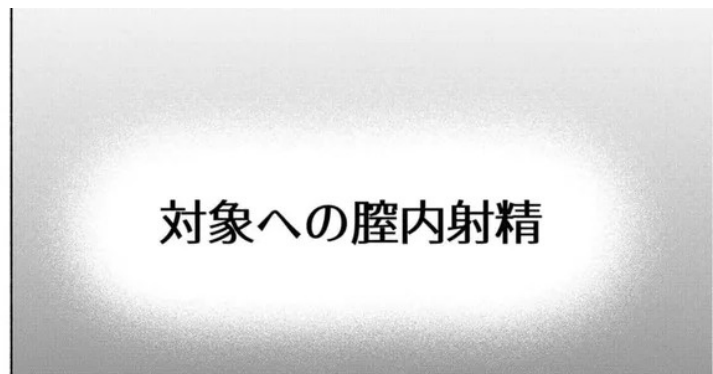








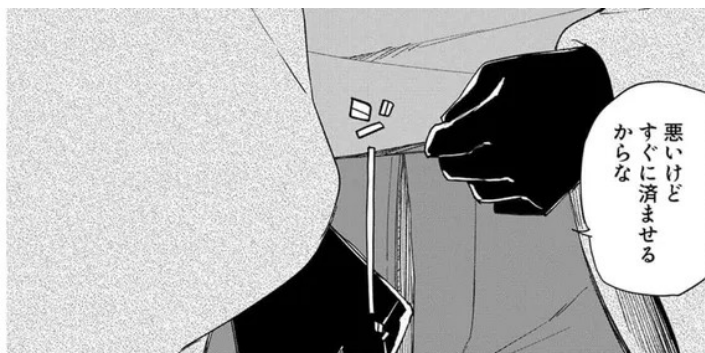






FAILURE ? R SUCCESS









壊れちゃうっ!!

激しいっ...!!

んああああ



シャーロット
そろそろ...!!

いいよ
おま●こに
せーえき
どびゅどびゅ
だしてえー!!



もつと奥う...
奥まで突いてえ...!!



いちばん奥
コンコン
当たってるう...!!







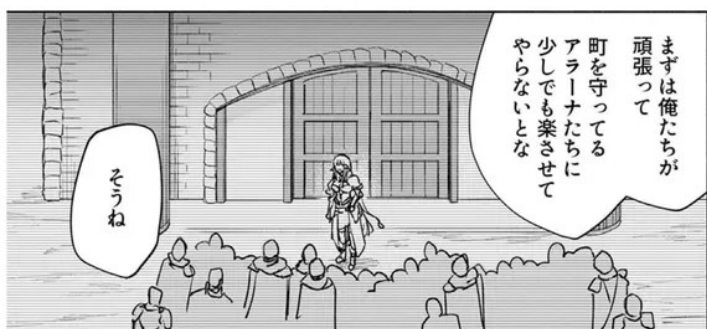
いくつかの
反社会組織および
その予備軍が
武器類を根こそぎ
失うこととなり
世界の治安が
少しだけよくなった







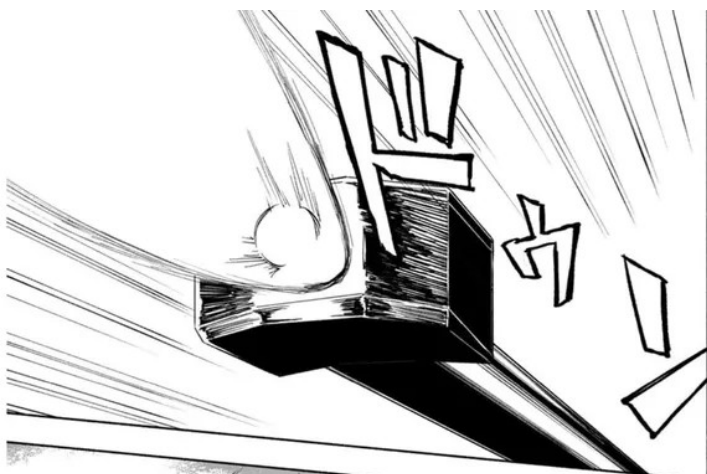




FAILURE ? SUCCESS

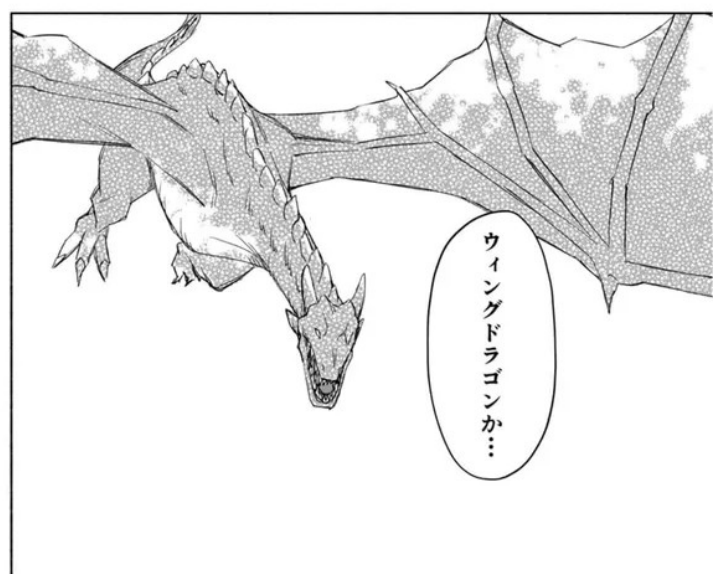




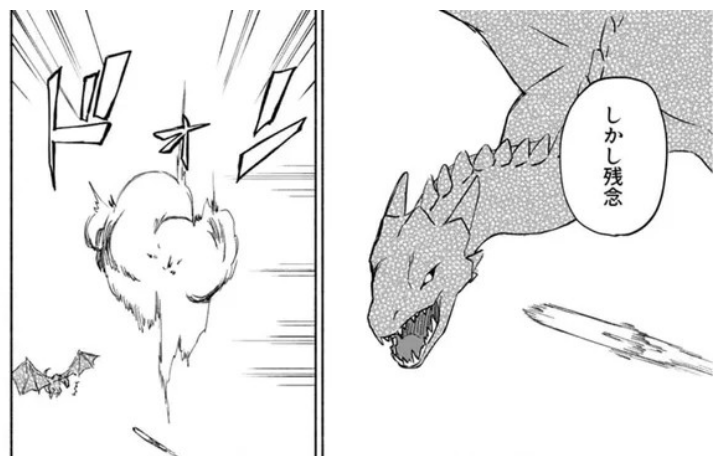
















冷静に考えろし
いくらなんでも
多すぎない？

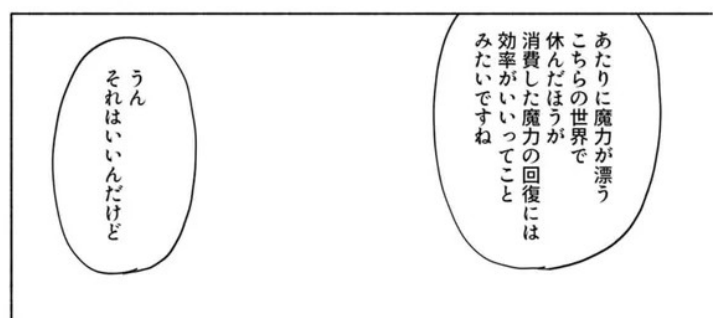
















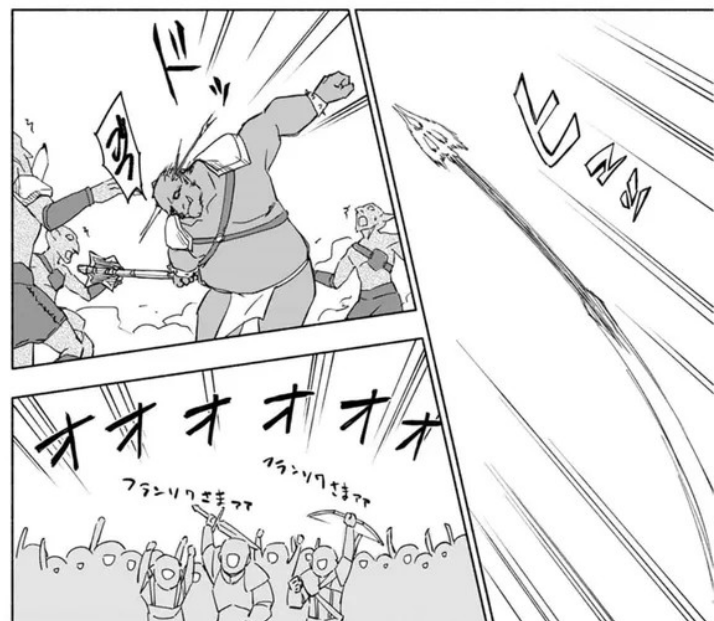
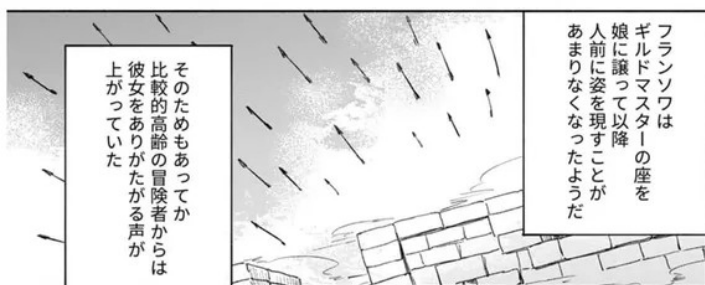






FAILURE ? R SUCCESS





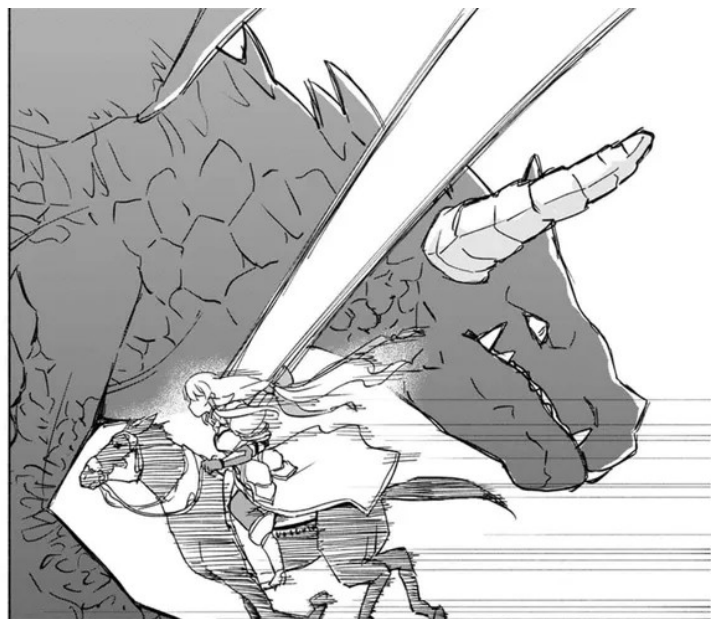




















DL-Raw.Net

FAILURE ? SUCCESS

DL-Raw.Net



















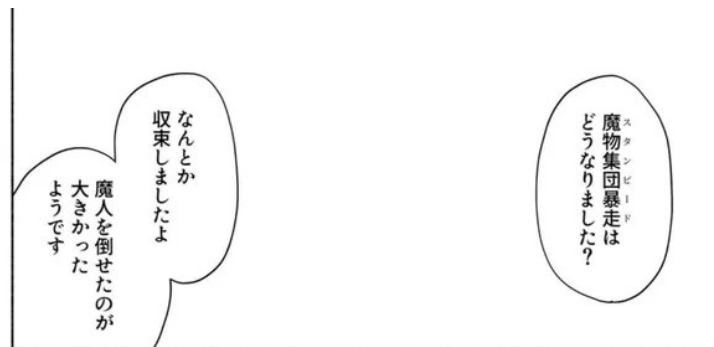


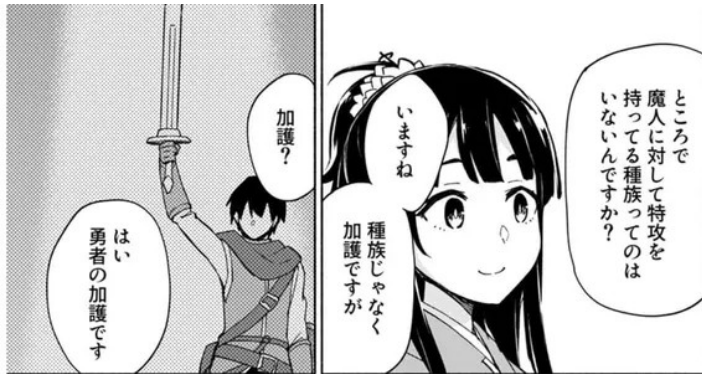


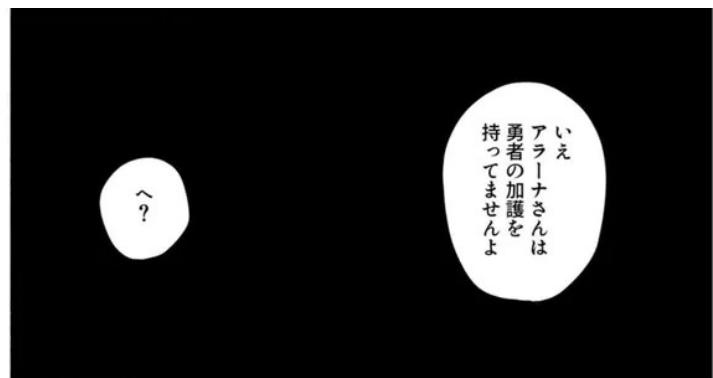


FAILURE ? SUCCESS













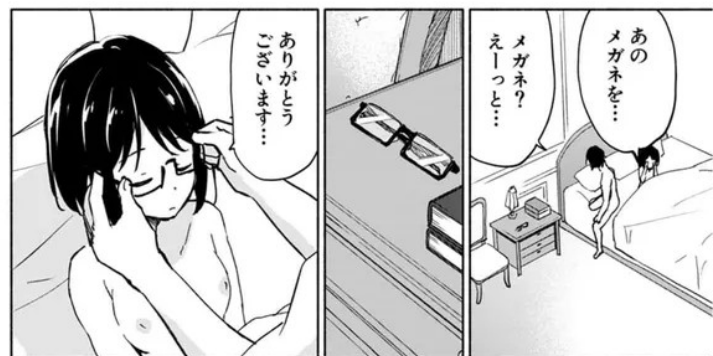






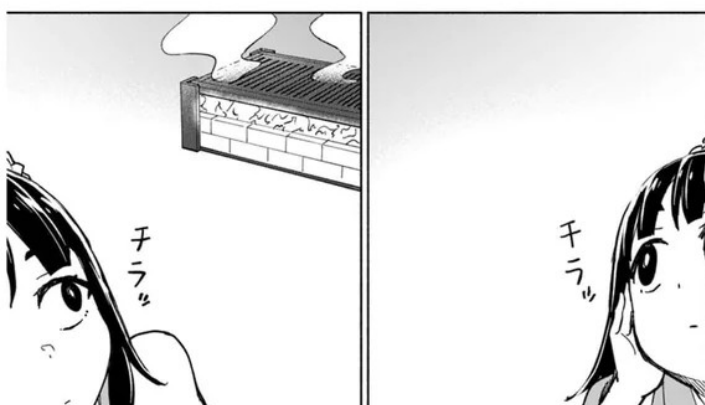












あ と が き

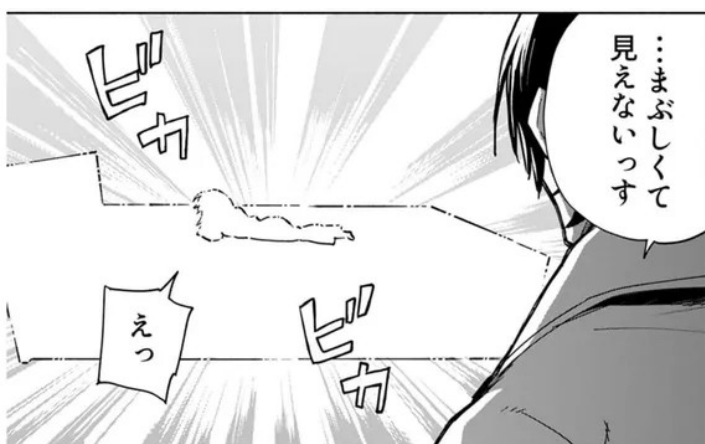
おかげさまでもう4巻です。
ありがとうございます。

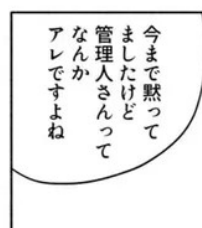
バトル展開が続き、
ようやく慣れたような気になっ
ていた裸体の描きかたを
忘れたりもしましたが、
今後もなんとか
頑張っていこうと思います。

よろしくお願ひいたします。









えっ、失敗!? 転移.....成功? 4

特典

ほーち先生書き下ろし SS

松岡斗吾が勇者として召喚され、数カ月が経った。
初日の夜、聖女アンナに癒された斗吾は、翌日からスキルの検証や訓練を始め、ひと月後には実戦に出た。
以降、彼は快進撃を続け、帝国は魔王に奪われた領土を回復しつつあった。

この日も斗吾は、かつて帝国領だった町で戦っていた。
廃墟となった町はゾンビやグール、スケルトン、ゴーストなどのアンデッドで溢れかえっている。

「そりゃっ!」

斗吾が光り輝く剣を振る。光の束のような刃はブウンと音を立て、ゾンビやグールの首を斬り落としていった。

これは彼が管理者から与えられたスキル【武器創造】によって生み出した『ビームソード』という武器だ。彼が最近見た

宇宙戦争映画を参考に作り出したもので、最初はあらゆるものを高温で焼き斬る剣だったが、いまはそこへ聖属性を付与している。そのためゾンビやグールはもちろん、実体のないゴーストやレイスなども倒せる武器となっていた。

管理者は、斗吾が【武器創造】を十全に活かせるように、さまざまな補助スキルを与えていた。そのおかげもあり、戦闘経験といえは体育の授業で習った剣道くらいしかなかった斗吾も、いまや剣の達人となっている。

「往生しなっせー！」

彼がビームソードを振るうと、ものすごい勢いでアンデッドたちが浄化されていった。

「トーゴさま、あぶない！」

高速で飛来した火球が、斗吾に迫る。

「おわっ!？」

驚く斗吾だったが、火球は彼に当たる直前で見えない壁に弾かれるように消え去る。アンナの防御魔術が、敵の攻撃魔法を防いでくれたのだ。

「アンナ、助かった！」

斗吾がそう言って目を向けると、アンナはにっこりと笑った。彼女は常に最前線で、斗吾を支えていた。

「あいつか……」

火球が飛んできた先には、ローブをまとった骸骨のような魔物がいた。

「おそらくこの町を支配する魔物、リッチですね」

「ようはボスってことだな」

斗吾が睨みつけると、それを悟ったのかリッチがカタカタ

と笑ったように見えた。

「悔しかったらここまで来てみるってか？」

リッチまでは数百メートルの距離があり、そのあいだにはアンデッドがひしめきあっている。ここからボスまで到達するのは、骨が折れそうだ。

「ふっ」

だが斗吾は、リッチを見据えながら不適に笑うと、ビームソードの刃を納め、柄を【無限収納】にしまった。

「その余裕が、いつまで続くか見物だぜ」

彼はそう言いながら左腕の前腕を撫でる。すると肘から先が黒く光沢のある材質に変わり、手首あたりからガンメタリックの筒が現れた。

これもまた斗吾が【武器創造】によって生み出した遠距離

攻撃用の武器であり、名を『マジックガン』という。大好きな宇宙海賊アニメを参考に作った武器だ。

「一発で仕留めてやるよ」

右手を左腕に添え、銃口をリッチへと向ける。

——バシユン！

マジックガンから光の弾が射出される。

「——ッ!？」

その光弾が自分へと高速で飛んできると察知したリッチは、息を呑むような仕草ののち、慌ててその場から飛び去った。

「おおっと、俺のマジックガンからは逃げられないぜ！」

かなりのスピードで飛行し、逃げようとするリッチを、光弾はさらなる速度で追いかける。

「——ッ……!」

光弾によつて胸の魔石を撃ち抜かれリッチは、ほどなく消滅した。

「ふんっ、あつけないな」

斗吾がすつと撫でると、マジックガンだった左腕が元に戻った。

リッチが倒され、統率を失ったアンデッド軍は、帝国軍によつてあつさりと討伐された。

勇者斗吾の活躍により、帝国はまたひとつ、領土を回復したのだった。



侵略された帝国領に、グラールヴァという場所があった。堅

牢な要塞を築いて魔境の魔物に備えていたのだが、魔王軍により占領されてしまった。

「そのグラールヴァ要塞の奪還を、俺に手伝つてほしいって？」

ある日、斗吾はその要塞の奪還作戦に参加するよう、要請された。

帝国としてはここを取り返し、逆進攻の橋頭堡きやうとうほにしたいと考えているようだ。

「俺の武器が、みんなにも使えたらよかったんだけどなあ」

斗吾の愛用するビームソードやマジックガンなど【武器創造】で作りに出した武器は、なぜか斗吾にしか扱えなかった。試しに普通のロングソードなども作ってみたのだが、斗吾以外の者には触れることすらできなかったのだ。強力すぎる武器を作成できる反面、そのようなデメリットがあったようだ。

そのため、強力な敵には斗吾自身が当たらねばならず、彼は文字どおり東奔西走していた。移動にはいつでも帝都に帰れる【帰還】が大いに役立った。

「俺ひとりで要塞を落とさせてわけじゃないよね？」

「まさか、そんな無茶は言いません」

斗吾の問いかけに、アルマが答える。

「トーゴさまに倒していただきたいのは、グラーヴァの黒騎士と呼ばれる敵将ただひとりです」

グラーヴァの黒騎士とは、その名の通り漆黒の鎧に身を包む、魔王軍の将帥だ。

軍をもって攻め込もうとすれば、目視できない距離から矢が飛来して指揮官を次々に射貫かれ、攻城兵器を持ち出せば魔術で吹き飛ばされる。剣や槍の腕も一流で、帝国軍は黒騎

士ひとりに手こずっているような状態だった。

「そんなやつ、どうやって倒せばいいの？ 近づくだけでもひと苦労っばいけど」

「ご心配なく。一騎打ちを申し出れば必ず受けてくれますので」
「なにそれ？」

「そういう人物のようです。なので、あまり大きな声では言えないのですが……」

とアンナは前置きしたうえで、帝国軍には黒騎士のファンが結構いるのだと話してくれた。無用な殺生を好まない、正々堂々とした戦い振りに好感を抱く将兵は多いのだとか。

「へえ、おもしろそうだね」

アンナの話聞いて、斗吾はグラーヴァの黒騎士なる人物に興味を抱いた。

数日後、斗吾はグラールヴァの地を訪れた。

要塞からかなり離れた場所に陣が敷かれ、そこには数万の帝国兵が駐屯していた。斗吾が黒騎士の討伐に成功すれば一気に攻め上る予定だ。

「それじゃアンナ、いこうか」

「はい」

斗吾は帝国の将兵に見送られながら、アンナひとり連れで要塞へ向かう。

要塞に辿り着くまでのあいだ、弓矢や魔術などでの攻撃はなかった。仮にあつたとしてもアンナの防御魔術で防げただろうが、どうやら黒騎士は斗吾たちの意図を察してくれたようだ。

「俺は帝国の勇者斗吾！ 黒騎士どのに一騎打ちを申し込みたい！」

斗吾が大声で告げると、しばらくして要塞の門が開き、ひとりの人物が姿を見せた。

漆黒の鎧を身に纏い、手には槍を、腰には剣を差したその者こそ、噂に名高いグラールヴァの黒騎士だろう。黒騎士は堂々とした足取りで、斗吾に近づいてきた。

「ご武運を」

アンナはそう告げ、斗吾から距離を取る。

黒騎士は斗吾から2メートルほど離れた場所で、立ち止まった。

「あらためて、俺の名は斗吾。帝国では勇者と呼ばれている。そちらはグラールヴァの黒騎士どので間違いないか？」

斗吾が尋ねると、黒騎士は無言でうなずき、槍を構える。

どうやらしゃべるつもりはないらしい。

それを見て斗吾もビームソードを取り出し、光の刃を出して構える。

「はぁっ！」

両者ほぼ同時に、踏み込んだ。

まずは斗吾が胴をめがけて光の刃を一閃する。それを黒騎士は仰け反ってかわし、身体を起こす反動で反撃しようとしたが、重さのないビームソードを振るう斗吾の二撃目が、先に繰り出される。

「——ッ！」

黒騎士はそれを、身をひねってかわした。

その後も斗吾の連撃が続き、黒騎士はそれをすべてかわし続ける。光の刃を槍で受け止めないのは、勇者の剣があらゆるものを斬り裂けると知っているからだろう。

そうやって防戦一方だった黒騎士もやがて斗吾の動きに慣れたのか、反撃してくるようになった。

「おおっと……！」

黒騎士の繰り出す攻撃はどれも鋭く、少しでも油断すれば急所を貫かれそうだった。

それから斗吾と黒騎士は、一進一退の攻防を繰り返した。その様子を、アンナは祈るように見ていた。

「トーゴさまがこれほどまでに苦戦するなんて……」

常に斗吾のそばで彼の戦いを見ていたアンナは、黒騎士の強さに驚いていた。

「——ッ！」

黒騎士が大きく飛びのく。槍のリーチを利用し、間合いの

外から反撃しようとの試みに見えたが……。

「甘いつ！」

斗吾は踏み込むことなく、その場で剣を薙ぐ。

「——ッ!？」

本来届かないはずの光刃が黒騎士に襲いかかる。ビームソードは刃の長さを自由に伸ばせるのだ。

「クッ……!」

戦いが始まって初めて声を漏らした黒騎士は、槍を半ばから切断されながらも身をひねったが攻撃をかわしきれず、左の肩当てを弾き飛ばされてしまう。

「オオオッ……!」

兜の奥からくぐもった声を上げながら、黒騎士は腰の剣を抜いて突進する。

「ほっ！」

斗吾が飛びのきながら、刃を伸ばした剣を振るうと、今度は右腕の装甲が弾き飛ばされた。

（意外と華奢だな……）

露わになった肩や腕を見て、斗吾は驚いたように目を見開く。

「アアアアアッ!!!」

そんな彼の表情に気づいたのかどうかはわからないが、黒騎士は怒声のような咆哮とともに踏み込んできた。その声は、少し甲高いように思えた。

そこから始まった黒騎士の猛攻は、すさまじいものがあつた。斗吾はなんとかかわしつつ反撃しようとしたが、手を出す隙がない。なんとかビームソードを繰り出しても、黒騎士の

剣は変幻自在の軌道でそれをよけながら、斗吾に攻撃を加えてきた。

どうやら黒騎士は、槍よりも剣のほうが得意なようだった。無理をすれば、剣ごと敵の身体を両断できるだろう。そうすれば斗吾もかなりの重傷を負うが、アンナがいれば死ぬことはない。だがそうすると、黒騎士を確実に死なせてしまうことになる。

斗吾は目の前の敵を、できれば殺したくないと思っていた。

「はぁっ!!」

そこで斗吾は、ほんの少し攻撃の手が緩んだ隙に大きくうしろに飛びのいた。

「——ッ!？」

黒騎士は素早く追撃しようとしたが、銃口を向けられてい

ることに気付き、息を吞む。

——ババババッ!

マジックガンの銃口から、光の弾丸が連発される。

「グッ……!」

なんとか踏みとどまり、続けて横に跳んだ黒騎士を、光弾は軌道を変えて追う。黒騎士は剣を振るって光弾を弾こうとした。

「——ッ!？」

だが剣は最初の一発で碎け散ってしまふ。

「ガァッ……!!」

続けて追いつがった数発の光弾が、黒騎士の鎧を容赦なく弾き飛ばした。

「やっぱり、女の人だったか……!!」

露出した肩や腕、そして声などから、斗吾はなんとなく思うっていた。そこで彼は、黒騎士を倒すのではなく無力化する方向に作戦を変更したのだった。

「うう……」

光弾を受けた黒騎士は倒れ、うめき声を漏らした。

それは褐色肌に銀色の髪を持つ美しい女性で、尖った長い耳が印象的だった。

「どうやら俺の勝ちだな」

褐色の女性が意識を失っているのを確認した斗吾は、マジックガンを真上に向け、上空へ光弾を撃つ。それはかなり高いところで、閃光を放った。

この閃光は勇者の勝利を帝国軍に知らせる合図だ。ほどなく数万の将兵が殺到するだろう。

「トーゴさま！」

アンナの声にふと我に返ると、要塞から無数の矢と魔術による攻撃が放たれていた。だがそれらは、アンナの魔術によって防がれる。

「……味方ごと攻撃するとはね」

要塞からの攻撃はかなりの密度であり、アンナが防いでいなければ黒騎士は死んでいただろう。

「それにしても驚きました。まさか黒騎士の正体がダークエルフだとは……」

「ダークエルフ？ それは魔物なのか？」

「いいえ、ダークエルフはれっきとした人間です」

「じゃあどうして……」

「なにか事情があるのかもしれませんが……いまはさがりま

しよう」

「ああ、でもその前に……デカイの一発お見舞いしてやるぜ！」

斗吾は要塞に向けてマジックガンを撃つ。

特大の光弾が放たれ、門が完全に破壊された。

「これで少しは攻めやすくなるだろうよ」

斗吾は黒騎士を抱えたまま、アンナとともに帝都へ【帰還】した。

後日、グラールヴァ要塞を奪還したとの報告が、帝都にもたらされた。



黒騎士の正体はダークエルフで、名をマリアンヌといった。

彼女は同じダークエルフの仲間とともに魔王軍と戦っていたが、ある日あの鎧を見つけて触れたところ、取り込まれてしまったらしい。

そしてそのまま操られ、魔王軍の将帥としてグラールヴァ要塞を守る戦力として使われるようになった。

ただ、なんとか無用の殺生をしない程度には、呪いに抵抗できていたらしい。魔王軍としても帝国軍を撃退さえできればよかったようで、過度な干渉はなかった。

聖属性を持つマジックガンの弾丸によって破壊された黒い鎧は力を失い、マリアンヌは呪いから解放された。

魔王軍として人類に敵対したマリアンヌは罪に問われたが、勇者斗吾と聖女アンナの口添えもあり、今後魔王軍と戦って帝国に貢献することを条件に、不問に付された。

グラールヴァ要塞の戦いから数日。

「あっあっあっ！ トーゴ……！ もっとおま×こ、じゅぼじゅぼしてえ……！」

回復したマリアンヌは、斗吾に抱かれていた。

仰向けで膝を立てて股を開くマリアンヌを、斗吾は前から犯している。斗吾が腰を打ち付けるたびに、汗に濡れた褐色の乳房が大きく揺れた。

硬直した肉棒がじゅぶじゅぶと音を立てて膣内をこすると、接合部からは白濁が溢れ出す。

斗吾はすでに、何度も彼女の膣内に射精していた。

彼女は自分より強い男性にその身を捧げると、決めていたらしい。幸か不幸かあの黒い鎧のおかげで、魔王軍にいるあいだも彼女の貞操は守られていた。その結果、マリアンヌは自分を降した男性に純潔を捧げるという願いを叶えられたのだった。

斗吾が自分以外の女性と関係を持つことを、アンナは認めていた。帝国における勇者とは、王侯貴族に匹敵する存在である。ならば彼が多く女性と関係を持つことには、なんの問題もないのだ。

「あっあっあっあっ！」

精液で満たされた膣腔を繰り返すられながら、マリアンヌは銀色の長い髪を振り乱して喘いだ。

「マリアンヌ……また、出すぞっ！」

やがて斗吾に、何度目かの限界が訪れる。

「だしてえ！ マリアンヌのぐちよぐちよおま×こに、トーゴのせーえき、いっぱいそそいでえ!!」

「あぁっ！」

斗吾は股間を強く押しつけながら、陰囊からせり上がってきたものを解放した。

——どびゅびゅっ!! びゆるっ！ ぶぽぽっ！ びゅぐるるっ……！

マリアンヌの秘奥をこじ開けながら、精液を放出する。

とろとろの粘膜に包まれた肉棒が何度も脈打ち、白濁を注ぎ込んだ。

「あっ……あっ……」

マリアンヌは、自身の聖域を蹂躪される快感に打ち震えていた。

「くう……」

射精が落ち着いたところで、斗吾は肉棒を引き抜く。

「あうん……」

ぽっかりと開いた膣口から、精液がどろりと溢れ出した。



マリアンヌもまた、アンナとともに斗吾を支えることとなった。

黒い鎧はもうこりこりということで、彼女は純白の鎧を身に着けることになった。彼女の褐色の肌に、白い装甲はよく

映えた。

少し落ち着いたところで、マリアンヌは斗吾たちを連れて故郷に帰った。

行方不明になっていたマリアンヌの帰還を、同朋たちは喜んでくれた。彼女を魔王軍から解放した斗吾は、大いに歓迎された。

そんな彼らを囲む住人の中に、セレスタンという名の少年がいたのだが、斗吾がそれを知ることとはなかった。

オシリスコミックス

えっ、転移失敗!? ……成功? 4

著者 ^{ひ の ひろ ま} 氷野広真
原作 ほーち
キャラクターデザイン ^{さ ら き} saraki

2022年8月5日 発行
ver.001

©Hiroma Hino 2022 ©Hochi 2022

発行者 青柳昌行
発行 株式会社KADOKAWA
<http://www.kadokawa.co.jp/>
編集企画 ボーンデジタル編集部

●お問い合わせ先
<https://www.kadokawa.co.jp/>（「お問い合わせ」へお進みください）

※内容によっては、お答えできない場合があります。
※サポートは日本国内のみとさせていただきます。
※Japanese text only

本電子書籍の全部または一部を無断で複製、転載、配信、送信すること、あるいはウェブサイトへの転載等を禁止します。
また、本電子書籍の内容を無断で改変、改ざん等を行うことも禁止します。
本電子書籍購入時にご承諾いただいた規約により、有償・無償にかかわらず本電子書籍を第三者に譲渡することはできません。
本電子書籍の内容は、底本発行時の取材・執筆内容にもとづきます。
本電子書籍を示すサムネイルなどのイメージ画像は、再ダウンロード時に予告なく変更される場合があります。
また、ご覧になるリーディングシステムにより、表示の差が認められることがあります。

この物語はフィクションであり、実在の人物・団体とは関係がございません。